２０２４年２月２５日　青戸教会　「常識を疑う」
聖書　列王記下６章８～１７節、ヨハネ福音書９章１３～４１節、高橋克樹牧師

本日の聖書個所は、ヨハネ福音書の９章１３節以下です。人々が以前は盲人であった人をファリサイ派の人たちのところに連れて行きました。イエスが安息日に土をこねてその盲人の目を開けられたので、ファリサイ派の人たちに、どうして目が見えるようになったのかを尋ねたわけです。その盲人は「あの方が、わたしの目にこねた土を塗りました。そして、私が目を洗うと見えるようになったのです」と答えました。

それに対してファリサイ派の人たちの中には「その人は、安息日を守らないから、神のもとから来た者ではない」と言う者や「どうして罪のある人間が、こんなしるしを行うことができるだろうか」と言う者もいたのでした。ファリサイ派の人たちの間で意見が分かれたので、再びその盲人に問いかけます。「目を開けてくれたということだが、いったい、お前はその人をどう思うのか」との質問に「あの方は預言者です」と盲人は答えました。

それでも、ユダヤ人たちは盲人の目が見えるようになったことが信じられないので、その盲人の両親を呼び出して問いただします。両親は「生まれつき目が見えない子でしたが、どうして目が見えるようになったのかはわかりません。もう大人ですから、自分のことは自分で話すでしょう」と返答を避けました。２２節を見ると、両親がこのように話したのは、ユダヤ人たちを恐れていたからであったと、その理由が書かれてあります。ここに「ユダヤ人」と出てくるのは、ファリサイ派の人たちだけでなく、１３節冒頭にあるように、その盲人をファリサイ派の人たちのところに連れて行った「人々」であるユダヤ人も含まれているのです。それは、イエスが盲人の目を癒したのが安息日であったために、イエスの癒しの業が安息日の規定に違反する罪人になることをユダヤ人であれば、誰もが問題にするからです。

埒が明かないので、ユダヤ人たちは、その癒された盲人を再び呼び出して「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ」と前置きをして尋ねます。これに対して、その盲人は「あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかったわたしが、今は見えるということです」と答えます。これに対して、「お前の目をどうやって開けたのかと再び問いただします。それに対して、その盲人は既に答えているのに、なぜまた聞こうとするのですか、と反論し、「あなたがたもあの方の弟子になりたいのですか」と尋ねます。つまり、イエスの弟子になりたいので、あれこれと同じことを繰り返し質問しているのかと切り返したのでした。この言葉にユダヤ人たちは頭に来ます。「我々はモーセの弟子だ」と反論してから、「我々は、神がモーセに語られたことは知っているが、あの者がどこから来たのかは知らない」と答えます。これに対して、その盲人は、「あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかったはずです」（３３節）と究極的な回答を引き出して、ユダヤ人たちを追い詰めます。問答に負けてしまったユダヤ人たちは「お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか」（３４節）と、当時の常識で言い返すのが精一杯だったのです。

９章の冒頭を見ると、そもそも、その盲人を見かけたイエスの弟子たちがイエスに「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか」と尋ねていることからもわかるように、盲人になった原因はその人の罪の結果だという

のが当時の社会的な常識でした。因果応報の思想によって、目が見えないという障碍の原因が罪を犯した結果だと受け止められていたのです。

３４節以下を見ると、その盲人は外に追い出されたのでした。そのことを知ったイエスがその盲人に出会うと、イエスはご自分が人の子であることを表明してわたしを信じるかと尋ねると、その盲人は「主よ、信じます」と言ってひざまずくと、イエスは「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる」と答えます。

これを聞いたファリサイ派の人たちは、自分たちは物事が見えていない、と言っているのかと自分たちが批判されたと受け止めてしまいます。これに対して、イエスは「見えなかったのであれば、罪はなかったであろう。しかし、今、「見える」とあなたがたは言っている。だから、あなたたちの罪は残る」と返答しています。このイエスの言葉は、自分には見えているという過剰な自信が物事を見えなくさせているということを指摘した言葉です。

このことを、９章の文脈から見ていくと、イエスの弟子たちが、生まれつき目の見えなくなっている人がなぜ、そのようになったのかを、その人自身の罪の結果なのか、それとも両親の罪によって目が見えなくなったのかという問いかけに対して、イエスはその双方を否定したうえで、「神の業がこの人に現れるためである」と断言します。盲目という障碍が神による業の結果だと言っているのではありません。神が障碍をわざとその人にもたらしたということではありません。この盲人が生まれつき目が見えないようになったのは、神がそのような障碍を与えたわけではなく、そういう障碍をどのように受け止めて生きていくかということをこの本人に考えるきっかけになったということです。私たちが今の自分の状況に対してどのように向き合って生きていくかを考える時、自分に対してどのような神の業がなされているかという視点で考えることから、自分の課題に向き合う力が生まれてくるということです。

私たちの人生の歩みにおいては、様々な障害や重荷を負って生きて行かなければなりません。その障害や重荷がどうして生じたかという現状だけを見つめるのではなく、その現状に対してどのように向き合って生きていくべきなのかを考えるとき、神の業がどのようなかたちでなされているのかを考えることが求められるとして、神をあがめたということです。９章の文脈で見ると、イエスによって目が見えるようにされた盲人は、「神が罪人の言うことは、お聞きにならないことは承知しています」（３１節）と言っています。さらに、「神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります」（３１節）と言って、イエスが「神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかったはずです」（３３節）と言って、盲目を癒した業が神の業であったことを言い表しています。この盲人がイエスの業を神の業であると証言しているのですが、それはイエスが神の子として、神の業を成して盲目を癒したということです。この盲人は目が見えないことを自分の罪の結果だとは少しも考えていません。

この癒しの業を捉え直すとき、それは自分の障害や重荷を取り除くことではなくて、イエスによって神の業が働いた結果として受け止め直して、この盲人のように受け止めることがまず求められます。神の業がこの人に現れるためであるというイエスの言葉は、この盲人のその後のユダヤ人たちとの会話によって実現していることがわかります。